

論文要旨

学位論文題目 子ども時代の貧困経験が人的資本形成に及ぼす影響—貧困の世代間連鎖の実証分析—

氏名 駒村（丸山）桂

日本では子どもの貧困問題が深刻な社会問題となっている。しかし、子ども時代の貧困経験が、その後の人生における生活水準にどのような経路で影響を及ぼすのかに関する研究は、特に日本においてはきわめて少ない。本研究は、子ども時代に貧困家庭で育つと、大人になっても貧困に陥るといふ「貧困の世代間連鎖」の要因を、子ども時代の貧困経験が子どもの人的資本形成に及ぼすのではないかという仮説のもと、理論的構築を行い、インターネット調査（回顧型調査）と縦断調査（前向き調査）という2つの性質の異なる調査から、分析を行った。

本研究で明らかになった点は、以下の3点である。

- ①子ども時代に生活保護受給経験がある人はそうでない人よりも、現在生活保護を受給する確率が統計的に高いことが確認された。学歴だけではなく、勤勉性や主観的健康度も成人後の生活保護受給につながる重要な要素であることが分かった。そして、独身であることや社会関係資本の欠如も、成人後の生活保護受給確率を高めることが分かった。
- ②中学生時代の生活保護受給経験は、学歴形成に決定的に負の影響を及ぼしている。かつての生活保護制度が長期にわたって義務教育の就学だけを給付対象としていたために、貧困家庭で育つ子どもには、高校進学や勉学の継続に大きな制約があった。また、子ども時代に生活保護受給経験がある人は、そうでない人に比べて、現在生活保護受給をしていなくても、現在の暮らし向きをあらわす等価世帯収入が低いことも分かった。
- ③共分散構造分析の結果、親の社会的相続（金銭投資、家庭内文化資本、養育の質）の質は、子ども時代の貧困経験がある世帯ほど低くなることが明らかとなった。社会的相続の質は、貧困からの直接的な経路だけでなく、親の階層によって異なる子ども観からも影響を受けている。本研究では、親の就業形態よりも学歴が、子育て観をより強く決定する要素であり、また貧困経験は男性よりも女性の人的資本形成に負の影響を与える傾向があることも明らかとなった。

本研究の学術的貢献は、貧困の連鎖の発生経路について、理論的枠組みをもとに仮説を設定し、それを実証分析によって検証したことである。理論面、方法論での学術的貢献は以下の通りである。

- ①貧困に至る要因の新たな理論的構築である。これまで一時期の「スナップショット」と

して捕らえられていた貧困世帯の生活を、「貧困の世代間連鎖」という視点から新たに「時間軸」を取り入れ、なぜ特定の人々に貧困リスクが集中するのかの要因について、理論的構築を行った点にある。本研究では、Bourdieu の家庭内文化資本と Kohn の親資源理論を援用することで、親の価値観が子育ての質に影響し、それが子どもの人的資本形成にネガティブな影響を与えるという新たな経路の理論的構築を行った。どちらの理論も、貧困の再生産ではなく、上流,中流以上の階層の者がそれを維持するための手段として構築された理論であるが、「貧困の再生産」の経路にもあてはまることを立証した。

② 貧困の連鎖に至る理論を実証研究で確認した点である。これまで階層の再生産に関する先行研究は、予算制約、家庭内文化資本など、ある1つの理論を検証する実証研究が中心であった。本研究は、親からの社会的相続と、成人後の人的資本（学歴、勤勉性、主観的健康度）を結びつけた理論に基づいて実証分析を行い、使用した変数のほとんどが統計的に有意になる結果を導き出した。回顧型インターネット調査と、縦断調査という2つの異なる調査を用いながらも、いずれの研究でも、子ども時代の貧困経験が学業成績や最終学歴の取得に負の影響を及ぼし、現在の貧困生活に結びつきやすいことを明らかにした。

本研究の結果による、子どもの貧困問題解消のための政策インプリケーションは、以下の通りである。社会保障政策においては、低所得世帯の生活を支えるための現金給付だけでなく、良質な保育サービスの提供と、短時間労働者に対する社会保険制度の適用拡大が必要である。教育政策においては、不利な家庭環境で育つ子ども達に対し、彼らの成長に寄与するための、就学前教育などの早期介入の支援策が必要である。

本研究は、使用したデータの制約という研究上の課題は残るものの、これまでの貧困研究において課題であった理論的構築と2つの異なる調査データを用いた実証研究を同時に行った点で、今後の学術研究や社会保障政策に一定の貢献を果たした、意義のある研究である。